

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. ICUに合格したら入学しましょう。(笑)
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に30の問い(1-30)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味70分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

I 文化的空白

1769年から1780年にかけてフランス人ミシェル・ギョーム・ジャン・ド・クレヴクールMichel Guillaume Jean de Crèvecoeurの著した『アメリカ人農夫からの手紙』は、アメリカを語る多くの著作の中でもっとも古典的な作品と言われてきた。現在のニューヨーク州北部にあたる地域で農耕を営む農夫ジュームズが、新しい国家アメリカの社会と文化について手紙を連ねる形でアメリカ論を展開するという内容である。なかんずく「アメリカ人というこの新しい人間は何者か」と彼の発した疑問は、このあとぞくぞくと出版されるアメリカ論のもっとも根源的な問題として論じ続けられることになる。全体は十二通の手紙で構成されているが、そのなかでも特に引用されることの多い第三番目の手紙には次のような文章がある。「そこでヨーロッパから来た人間が見るのは新しい社会であって、これまで見てきたものとは違っています。この社会は、ヨーロッパのように、あらゆるものを所有する大領主と無一文の群衆とで構成されているではありません。ここには貴族も、宮廷も、王侯も、僧侶も、教会領地も、ごく少数の者にきわめて歴然たる権力を与えている隠然たる勢力も、何千の人々を使用する大製造業も、素晴らしく優雅な贅沢品もありません」。要するにヨーロッパ人の目から見れば、社会を構成している重要な要素がアメリカには何も無いということになる。19世紀前半に活躍したアメリカの小説家ジェームズ・フェニモア・クーパーもこれと似たことを述べている。彼は『アメリカ人の観念』の中で、アメリカ作家が直面する問題の一つに「素材の貧困」をあげている。「ヨーロッパでは作家の富に貢献する鉱脈は豊かに発見されるが、ここアメリカではその鉱石すらほとんど見かけない。歴史家のための年代記がない。諷刺作家にとっての愚行が無い。劇作家にとっての様式が無い。道徳家にとっての社会的な規範に反する大それた違反がない。農夫に野良着がなく、判事にかつらがなく、将軍に司令杖がなく、執政官に王冠がない」とアメリカ文化の空白を連ねる。独立からほぼ半世紀たち、ようやくアメリカ文化を謳歌しその国の命運を語る国民的作家が待望されてきたころ、作家たちは題材にすべき適当な文化的要素が欠けているという決定的な障害に直面している。

アメリカ大陸の山々、川、森とそこに住む動物。こうした太古からの自然そのものが原住民のインディアンにとっては神々の住む世界であった。しかし、後からやってきたヨーロッパの白人の視点から見ればアメリカは「無い無いづくしのカタログ」の世界である。ヨーロッパに当然あるものがまったく存在しない世界、「荒野(wilderness)」と清教徒が名づけた原始状態の自然があるだけである。その原始状態の自然を白人が目の前にしたとき彼らはそれをどう把握したのか。未知なるものに対してどう立ち向かったのであろうか。

本論文では、ヨーロッパに起源を持つ神話に自己理解を求めたアメリカ文学研究の一環をたどり、その神話的理解の成立と崩壊の過程を探る。その上で、変化をとげつつあるその自己理解の具体例として、アメリカ文学史再構築の動きを取り上げ、文学史の方法論として、アメリカ理解の変化がいかに取り込まれているかを論ずる。

II 神話の形成

アメリカ大陸発見というと、1492年にコロンブスのなした偉業とされているが、実際は彼が最初でなかったこともよく知られるようになった。地図を広げるより、地球儀で見るとすぐ分かる。スカンジナビア半島から大ブリテン島、アイスランド、グリーンランド、そしてカナダ北部のニューファウンドランド島までの島づたいの距離はそれほど大きくないのである。11世紀はじめ頃ヴァイキングのレーフ・エリクソンがアメリカ大陸東北部にやっていたことは彼らのサーガ（北欧中世の散文物語）に書かれているし、そこに登場する「ヴィンランド（葡萄の国）」がアメリカ大陸北東部海岸であることも定説になっている。また、それらを裏づける考古学的発見もなされている。にもかかわらず、アメリカ大陸発見というとコロンブスが持ち上げられるのは、それなりの理由がある。それは彼が、（自分自身は死ぬまでそれがインドであると疑わなかったが）アメリカ大陸という新世界に特別な意味合いを与えたからである。ヴァイキングにとってそれまでは単なる漁業基地であったアメリカとは一体何なのか。この問いに対して彼はヨーロッパの神話による答えを持ち込んだのである。

いふなれば、新大陸という未知なる世界を理解するために、神話という既知なるものを媒介とした意味づけが必要だった。つまり、ヨーロッパに起源を持つ神話をアメリカの文化的空白の地に応用していったのである。コロンブス以来、イギリス・ルネッサンス期から17世紀にかけて、アメリカ理解のために新大陸に持ち込まれた神話には、大別して二つの起源があると考えられる。その一つは、ギリシャ・ラテンに源を発する牧歌的景観、それに旧約聖書のエデンの園が混然一体となった「楽園神話」である。これは楽園という言葉からも推測できるように、自然が、ことに人の手の加わっていない自然が重要な意味を持っている。もう一つは新約聖書に唱われる「神の国」の神話である。これには、イギリスで果たしえなかった宗教的ヴィジョンをアメリカで完成しようとした意図が含まれている。旧世界では墮落した宗教的社会的完成を人々はアメリカの新天地で再度試み、アメリカを「新たなるエルサレム」とか「約束の地」とか「丘の上の町」と呼んで、神の支配する完全な社会の建設を目指した。

III 「地上の楽園」神話

これら二つのアメリカの神話的理解のうちまず楽園神話から考えてみよう。バートレット・ジアマッティは1966年に『地上の楽園とルネッサンスの叙事詩』を著したが、この書物は西洋古典の世界における「庭」の起源を辿った後、ダンテ、アリオスト、タッソーなどのイタリア・ルネッサンス文学に描かれたキリスト教的楽園の系譜を分析した。さらにイギリス文学におけるスペンサーやミルトンの叙事詩にあらわれる楽園のイメージを研究したものである。しかし、われわれにとって興味深いのは、その彼が前書きでアメリカ文

学に一言触れている箇所である。彼は「楽園を見つけ出せると言う期待は新大陸発見によってきわめて高まったようである。そして、アメリカ文学そのものは広大な汚れを知らぬ庭において、幸福と無垢とを探求する記録としてたえず読まれる」と書いた。ここで言われている「地上の楽園」とは、旧約聖書創世記にあるごとくアダムとイヴが楽園を追放されたのち、全世界はノアの洪水によって水没するが、その時にも地上に残されたはずの楽園のことである。中近東のどこかにその楽園が残存していると中世ヨーロッパでは広く信じられていた。

この楽園を自ら発見したと考え、その興奮をヨーロッパに伝えたのが他にもないアメリカ大陸の発見者クリストファー・コロンブスである。コロンブスは計四回のアメリカ大陸への航海をしているが、サムエル・エリオット・モリソンの伝記によれば、その報告書からは彼が次第に新大陸発見をきわめて宗教的色彩の濃い理解のうちに捉えていたことが明白であると言う。ことに、第三回目の航海では中央アメリカにあるオリノコ川がメキシコ湾に流れ込んでいるところを目撃し、それをエデンの園から流れる四本の川の一つと信じ込む。そして、その川の上流には「地上の楽園」があるとの確信を持つにいたる。

イギリスが最初に新大陸に植民をおこなったのは1607年のジェームズタウン建設である。気候も温暖で豊かな自然に恵まれたその地には、それ以前にもイギリスからの探検隊が訪れ、時の処女王エリザベス一世にちなんでヴァージニアと名づけていた。シェークスピアが活躍している頃、このヴァージニアから新大陸の驚くべき知らせがぞくぞくとロンドンに届いたが、その多くは信じられないほどの自然の豊かさ、鳥や獣、魚の豊富なことを書き立て人々の想像を刺激した。当時の宮廷詩人マイケル・ドレイトンにはこれからヴァージニアに出かける人たちに寄せて作った詩があるが、新大陸の豊かな自然は「地上の楽園」神話と結び付けられている。このようなイメージに引かれた多くの移民がイギリスを後にしてアメリカ大陸に出かけた。ドレイトンばかりでなくイギリスのエリザベス朝時代には新大陸からの情報を盛り込んだ作品が多くある。また、17世紀の詩人ジョン・ダンも新大陸発見の興奮を比喻に用いて、恋人と親しくなる興奮を描いている。彼は恋人のことを、「マイ・ニューファウンドランド、マイ・アメリカ」と呼ぶ。また、アンドルー・マーヴェルもバミューダ島に楽園の生活があるとする詩を書いている。

このように発見当時から楽園のイメージを与えられてきたアメリカ大陸は、以後もそこに生み出される文学に楽園が語り継がれることになる。この点を時代を追って現代まで際立たせたのがレオ・マークスの『ザ・マシーン・イン・ザ・ガーデン』(1964年出版)である。彼は自ら「パストラリズム」と名づけた緑の楽園を求める衝動がアメリカ人の精神を支配していると共に、19世紀後半には機械文明の発展によって蒸気機関車が文化発展の象徴として作品の中にたびたび登場し、楽園のイメージの中に突然容赦なく突入してくることを指摘した。パストラリズムとは文学のジャンルの一つである「パストラル」、つまりギリシャ・ローマ時代以来ヨーロッパ文学の中で受け継がれてきた「牧歌」にその根源を発している。すなわち、パストラルでは必ず理想的な自然の景観が描かれるが、マークスは

それを求める特徴的な心の働きを、エリザベス朝詩人たちのアメリカを楽園とする見方から説き起こし、シェークスピアの『嵐』、ヘンリー・ディヴィッド・ソローの『ウォルデン』を始めとする19世紀の主要な小説、さらに、フォークナーや、フィッツジェラルドの『偉大なるギャツビー』などをとりあげ、アメリカ文学に一貫して観察できることを示したのである。彼によれば『嵐』はイギリス文学でありながら、最初にアメリカとの接触を描いたという意味でアメリカ文学の先駆けとすべき作品ということになる。

このマークスの研究はもう一つの代表的なアメリカ研究がその背後にある。それは、アメリカ西部のポピュラーカルチャーのなかに庭園を造り上げようとするイメージが広範に見られるというヘンリー・ナッシュ・スミスの『ヴァージンランド』(1950年出版)である。彼は、農業に基盤を置いた独立自尊の社会を西部に建設し、西部を世界の庭園にするという意識がさまざまな民衆レベルの文化の中に読み取れるということをも具体例をあげて紹介した。ここで言う庭園とは、実際の農業社会の営みの中に組み込まれた楽園であると考えられる。

IV 「神の国」神話

さて、いま一つの神話的解釈とは宗教的ヴィジョンのもとに新大陸を捉える見方である。先にあげたコロンブスの新大陸発見は「地上の楽園」発見という思い込みを含めて、きわめて宗教的色彩の濃いものであるが、その理由の一つに、当時彼が影響を受けていたフランシスコ修道会スピリチュアル派の終末論がある。そして、彼の終末観をさらに確固たるものにした書物に、ピエル・ダイの『イマゴ・ムンディ(世界像)』があるが、それによれば、この世の終末までに残された年月は150年であるという。フランシスコ会はそれまでにキリスト教を全世界に広め、異教徒を救いに導く務めがキリスト者に課せられていると教えていた。コロンブスはこうした終末論的世界観に強い関心を持つと共に、自分の名前に特別の意味を感じていた。彼の名前クリストファー“Christopher”はラテン語の語源的には“Christ”を“fero”するもの、つまり「キリストを背負う」という意味である。キリストの教えを新大陸に運ぶ務めと責任が自分には課せられていると感じていたのである。

17世紀前半に宗教的な理由でイギリスからの脱出を試みたグループがある。清教徒(ピューリタン)といわれる彼らはイギリス国教会の堕落を嫌い、新天地アメリカで聖書に基づく本来のキリスト教を取り戻し、理想の社会を建設しようとした。それによって、新たなエルサレムの実現としてアメリカを捉える見方が広く行われ、17世紀中葉から後半にかけてのニューイングランド一帯にキリスト教に基づく神話的理解が成立していた。その観点をレトリックの方法から論じた研究にサクヴァン・バーコヴィッチの『アメリカ人自我のピューリタンの起源』(1976年出版)がある。彼は予型論と言われる聖書解釈の方法をピューリタン文書の中に見だし、その方法がアメリカ精神の枠組となって現在にいたる点を明らかにした。そもそも予型論とは旧約聖書と新約聖書の関係を明らかにしようとする

る釈義の方法で、中世の教父たちによって盛んに用いられた。それによると、旧約聖書と新約聖書には、旧約における預言と、新約におけるその成就という対応関係があると前提する。そして、旧約聖書の出来事や人物を、新約聖書のキリストに関する事柄の予め示された型であると考えるのである。例えば、旧約聖書ヨナ書には、鯨に飲み込まれて三日三晩の後、陸地に吐き出された男ヨナのことを書かれているが、新約聖書マタイ伝ではキリストが「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるであろう」と述べている。すなわち、ヨナ書に書かれている予めの型が、キリストの復活によって実現するのである。アメリカに渡ったピューリタンはこの聖書の解釈方法に注目した。それは彼らの置かれた状況がイスラエルの民衆の置かれた立場ときわめて類似しているからでもある。エジプトやバビロンの異教の支配を逃れ、紅海を渡って約束の地にいたるイスラエル人。それに対して、ローマやイギリスの腐敗した宗教と政治を逃れ、大西洋を渡ってアメリカに新たな都エルサレムを作ろうとする清教徒。こうした歴史的にパラレルな土台の上に立って、ピューリタンはアメリカこそ旧約聖書の預言が実現されるところと考えた。マサチューセッツ湾岸植民地を導いたウィンスロップは、新大陸に彼らが試みる社会を「丘の上の町」と呼んで、神の直接支配する理想社会の建設を目指しているが、いふなれば、彼らが植民を始めたニューイングランド地方の「ニュー」には、新約聖書の「新」に連なる意味が意識されているのである。

以上のような予型論をさらに拡大解釈すれば、R・W・B・ルイスの著書『アメリカンアダム』(1955年出版)も、予型論的枠組みを持ったアメリカ文学研究と言えよう。この書物の中心点は19世紀アメリカ文学の主要小説に登場する男性主人公にはある一定の特色が存在し、その原型が旧約聖書創世記のアダムにあると捉えることである。彼はアメリカンアダムの定義を次のように述べる。「この個人は一人で立ち、自らに頼り、自らの力で前進し、彼独自の生得の力により、たとえ何が彼を待ち受けていようとも、これに立ち向かう。聖書を愛読した世代において、この新しいヒーローが墮落以前のアダムと同一視されたのは、きわめて自然だった。アダムは最初の人間であり、人間の原型であった。彼の道徳的主張は経験からでたものではなく、彼は新しい人間であるために、徹底的に無垢であった。世界と歴史はすべて彼の前にあった。彼は創作者の典型、すぐれた詩人であり、周囲のものに名前を付けることにより言葉を創造した。これらすべてのことが、アダムとしてのアメリカ人のイメージに含まれていた」。実際、アメリカの小説の多くには歴史や過去を担わず、単独で未知の世界の初めての経験に乗り出すタイプの男性主人公をたやすく思い浮かべることができる。ホイットマンの詩集『草の葉』の主人公、エマーソンやソローの作品に現れる語り手など、その例には枚挙のいとまがない。

ところで、このような予型論的アメリカ理解には、当然、選民思想がその根底にある。つまり、神によって特別に選ばれた民は元来イスラエル人であるが、そのイスラエル人もなし得なかった地上における神の国を建設しうる民、それこそアメリカ人であるという意識である。最後のピューリタンと言われ、18世紀中頃に「大覚醒」という宗教的リバイバ

ル運動をおこした人物にジョナサン・エドワーズがいるが、彼は自分の根拠地マサチューセッツ州のノーサンプトンから世界の贖^{あがな}いが始まると書いている。こうした考え方は、独立革命を経て民主主義国家としてのアメリカを支える意識となり、その延長上には、アングロ・サクソン優越論に根ざした民主主義の指導者としての使命感もあいまって、世界を贖^{あがな}う責任を負った国家という意識にアメリカを導いていくことになる。アメリカがヴェトナムに介入していった時にもこのような自己理解がアピールされた。

V 神話の崩壊

さて、ここまで述べてきたことが過去のものになったのが近年のアメリカ研究である。実際ここ十数年のアメリカ文学研究の変化には、すさまじいものがある。これまで論じてきたような、神話の移植によるヨーロッパ文明の完成者としてのアメリカという見方が、決定的な批判にさらされたのである。考えてみると地上の楽園神話にしても神の国神話にしても、それらをアメリカ文化の主要な要素として研究し提示してきたのは、おもにアングロ・サクソン系の白人のしかも男性の研究者であった。さらに、これらの神話に起源を辿ろうとする研究は、おもに第二次世界大戦からヴェトナム戦争の間になされてきたものであることに気がつく。言うなれば、アメリカが世界の指導的地位に立ち民主主義の教師として確固たる自信を築き上げ、そのことに疑いを持たなかった時代の所産である。意識するとしないとに関わらず 50 年代、60 年代というアメリカの絶頂の時期の雰囲気や研究者たちも呼吸して論を立てていた。そうした研究が時代遅れになっていった例として、先にも触れたスミスの『ヴァージンランド』を取り上げてみよう。この研究は 1950 年に出版された代表的なアメリカ文学研究書で大きな影響を与え続けてきたが、1986 年、彼は自分の本を読み直して次のように書いている。「今回自分の『ヴァージンランド』を再読してみて気がついたことは、自分の研究の姿勢が思っていた以上に当時の基本的なアメリカの神話やイデオロギーに影響されていたということである。このことは自分が学問としてのアメリカ史の基礎訓練を受けた頃、研究者の間に漂っていた知的雰囲気を考えるとおそらく避けられないことであった」。

1960 年代も後半になると、公民権運動が高まり、奴隷としてアフリカから連れてこられた黒人が民主主義制度の外側に無視されたままであったことが当然ながら暴露された。それに連動する形で、社会で活躍する男性を支えてきた女性も民主主義的公平の原則からはずされてきたことが強く意識され始めた。そればかりではない。共産主義からヴェトナムを守る聖戦であったはずの戦争の敗北を機に、WASP (ホワイト・アングロ・サクソン・プロテスタント) 中心の民主主義文化にたいしての根底からの疑いが生じてきた。アメリカ文学においても WASP の男性の作品を WASP の研究者のみが解釈し理解しているのでは片寄りもはなはだしいと言う批判が大きな支持を得るようになったのである。

また、もう一つの大きな要素として、ヨーロッパ、特にフランスの文芸批評の圧倒的な

影響がこの傾向に拍車をかけた点が挙げられる。具体的に言えばフランス文芸批評からもたらされた「脱構築 (Deconstructionism)」の方法がアメリカ文学研究の一世を風靡し、あたかもこの立場に立たないと時代遅れであるような時期が十年あまり続いたことである。その後、この学派の中心的人物の急逝や、その他の問題も指摘され、ここ二、三年のうちには今度は脱構築を持ち出すことさえもはばかれる状況が生まれてきているのも事実である。その様な急激な盛衰を遂げたものの、副産物として残していった観点到に評価すべき点がある。その一つが“Indeterminacy”という考え方である。つまり、この批評の立場では、作品には作者の意図がただ一つ絶対的に存在するという前提を持たない。従って、どの読者が読んでも作品の意味が一つにまとまるとは考えず、読み手によっていかようにも変わりうるものであって、一つに決定できるものではない、と考えるのである。すると、この論文の前半で扱った代表的研究がアメリカ理解に神話的要素を持ちだしたのは、他にも多くの作品や作家がいるのに、たまたま、そのことが当てはまる文学を選び、そのことが理解できる立場の読者に向けて、当てはまるように解釈したに過ぎない、ということになるだろう。実際、祖先からの自分の土地を略奪されたインディアンにとって、あるいは奴隷として連れてこられたアフリカ人にとってアメリカが楽園であるはずはない。また、ロシア革命を逃れてやってきたユダヤ人にとってキリスト教の「神の国」神話が自分の問題にならうはずがない。

そして、こうした研究は客観性がある根底にあるとされていたにもかかわらず、実際は無意識のうちに WASP の作り上げたアメリカ文化の特殊性を自画自賛する立場から自由でなかったことがあからさまになってきたのである。WASP が持ち込んだ神話のみによって「アメリカらしさ (Americanness)」なるものを論ずることの危険性と無意味さが、黒人や女性、インディアンなどの少数民族の存在と共に強く理解されてきた。

アメリカ文学においてこのような問題が強く意識されるのは、そもそも国家の成立ちが多民族的であるためである。読者と作品の間に、人種の問題が色濃く入り込んでくる。しかも、その起源から移民の国であったアメリカには、現在でもおびただしい数の移民が押し寄せている。国境を接するメキシコ人の流入を始め、東南アジアからの難民、東ヨーロッパ系ユダヤ人の流入もあいつぎ、常に人口構成が著しく変化し、移民別による社会階層を生み出している国である。このままでいくと 21 世紀のそれもかなり早い時期に、これまで主流であった WASP と呼ばれてきた人種が一つのマイノリティーになる日が確実に訪れるであろう。だとするとこのような国家においての文学史とはどのような形態を持つべきなのだろうか。この基本的な問題を考えなければならない状況が生じてきたのである。

VI 文学史の再構築

この問題を扱うには、そもそもアメリカ文学とは何かと言う問いから始めなければならない。しかし、これは自明のようでなかなか明確な答えの得られない問いである。例えば

ここで「アメリカ」と言うのは、厳密に言えば南北アメリカ大陸が含まれる恐れがある。それを避けるにはアメリカ合衆国文学と呼ぶべきであろう。しかし、そうすると合衆国としてアメリカが独立する以前はイギリスの植民地であるから、その時代のものはイギリス文学と考えるべきかと言うとイギリス文学史の方でそうはなされていない。どのイギリス文学史を見ても、独立以前にアメリカ大陸で書かれた文学を含んでいるものは見当たらず、植民地文学としてアメリカ文学史に含まれている。しかも、アメリカを植民したのはイギリス人だけではない。スペイン人はもっと早くから西海岸を支配し、その名残りはロスアンジェルス、サンフランシスコ、グランドキャニオンなどのスペイン語の地名に見ることができる。同様にフランスもカナダからミシシッピー川流域をへてニューオーリンズまでの地域を南北に領有していた。ルイジアナとはフランス国王ルイ十四世にちなんで1681年に付けられた地名である。どちらの場合もそれぞれスペイン語、またはフランス語でアメリカ植民の歴史を残しているが、それはアメリカ文学史で論じられることはなかった。だとすると合衆国が成立することになる地域で書かれた文学で、英語で書かれたものをアメリカ文学と呼ぶとすればよいのだろうか。ところが、最近ではスコット・モマディーやレスリー・シルコーといったインディアンで英語の作品を書いている作家が活躍しているが、それでは英語で書かれていないインディアン文学はアメリカ文学に入れなくてよいのかという問題が論じられ始めた。

このようにドイツ文学、フランス文学、日本文学などが、言語と地域性によってかなり厳密に定義できうるのに反して、さまざまな人種をかかえたアメリカ文学は、英語で書かれた文学という点ではイギリス文学と重なる部分が多く、さらに、アメリカの独立以前は論理的に言って作者はイギリス人であるから、どのように限定するかはそう簡単に決められない問題ある。逆に言えば、イギリス文学の中にすでにアメリカ文学の特徴的なテーマを先取りしていると考えられる作品もあるわけで、さきにも論じたマークスはシェークスピアの『嵐』を、また最近ではスペングマンがミルトンの『パラダイス・ロスト』をアメリカ文学の先駆的な作品として論じている。つまり、歴史的にも、言語的にも、地域的にも一筋縄の限定ができない。神話的理解の崩壊と共に、以上のような理解が広まり、たちかえって、アメリカ文学とは何をしてそう呼ぶのか、というそもそもの定義が求められてきた。

このような特異性を持ちながらも、アメリカ文学にはそれをアメリカ文学たらしめている独特の要素があるはずで、従来の文学史家たちはその独特の特徴としてアメリカらしさを文学史の中で語ろうとした。彼らはエマーソンやホイットマンを基礎に、アメリカ独特の国民性を個人主義、独立自尊、進歩などに求め、民主主義的社会の文化の特徴を浮き彫りにし、そこにヨーロッパ貴族社会の洗練さを持たない、むしろ洗練さをスノビッシュと排除しようとするアメリカ文化の気質を示してきた。アメリカを楽園と捉えようとした文学はヨーロッパ的伝統文化を廃して自然との関わりを深く持った作品を生み出し、主人公なるアメリカンアダムの無垢をその特徴としてきた。こうしたアメリカ精神の独自性の起

源とその生成をアメリカ文学史は論じようとしてきた。ところが、この自明の原則が原則として機能しなくなってきたのが最近の状況であることはすでに論じた点である。なぜなら、民主主義文化を標榜するアメリカ文学の主張や、そのナイーヴな自己理解が、実は他の民族、黒人やインディアンや東洋人への抑圧のうえに成り立っていたことが今さらのように意識されだしたからである。だから、これまでアメリカらしさとは何か、と言ったときには、無意識のうちに、客観的立場にある読者を対象にしていたが、実際はその様に前提される読者などは存在しないことが指摘された。つまり、「誰にとって」という問いが常に意識されるようになったのである。

こうした文化的に様々な出生の違いを内包するアメリカ文化において、それでは一体何を文化の核とすべきか、伝統として受け継ぐべきものは何か、という大きな問いが次に浮かんでくる。近年評判になったアラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』が問題として指摘した点もこれと無関係ではない。近来、教養としてのヨーロッパ文化がアメリカの若い人たちに無視されつつある状況があるが、これはアメリカ精神が閉鎖的になってしまった危機的状況ではないのか、とこのベストセラーは訴える。たしかに、中世を持たぬアメリカにとって必然的に伝統とは古きものを保つことにはならず、文化を変えていく原動力だけが受け渡されていくのである。すなわち、常に新たな移民が社会に組み込まれることによって過去の蓄積がなされない。そこで、伝統とは常に自らを新たに作り変えていく力そのものに立ち戻らざるを得ない。エマーソンの「アメリカの学者」にある有名な文章が思い出される。彼は「それぞれの時代は独自の書物を持つべきである。あるいは、それぞれの時代は次の時代のために。古き時代の書物はそぐわない」と書いている。アメリカ文学史について述べれば、これまで決定版とされてきた二巻本の『アメリカ合衆国文学史』は、1948年の出版以来もっとも権威あるアメリカ文学史として読み継がれてきた。しかし、その著者の一人であるロパート・スピラーが「それぞれの世代はその世代独自の文学史を生み出さなければならない」とその前書きで書いていたのである。そして、ほぼ半世紀たった今、同じケンブリッジ大学から新たな四巻本のアメリカ文学史が出版されようとしている。

文学史を扱うときによく論じられる言葉にキャノン(Canon)という言葉がある。キャノンとはもともと「正典」と言う意味で、聖書の成立からとられた言葉である。様々な伝えられてきた宗教的文書のうちどれを聖書に含むべき正典として認めるかという正典性(Canoncity)の問題は、キリスト教では教会指導者たちの会議においてはしばしば重要な議題であった。それと同様に、様々な文学作品のうち一体どの様な作品を一国の文学史に取り入れるべきなのかという問題が今アメリカ文学研究では真剣に考えられている。例えば WASP の代表的詩人ロングフェローにあてられるページ数がごくわずかになっていくのに反して、黒人奴隷の女性が書き残していた日記や記録が新たに取り入れられてきた。ニューイングランドのハーバード大学を中心とした作家たちの代わりに、西海岸の日系移民の作品が論じられるようになった。そこには異質なものを取り入れていく懐の広さがあ

る。多様性に対する寛容がある。それはアメリカがいまだに若く、常に変化の途上にあることを示していると言えるかも知れない。当然、文学史もオープンエンディングの物語にならざるをえないが、そこにこの国の文化の持つ面白さがあると言えよう。あるイギリス人作家は20世紀初頭に、主要なアメリカ小説の批評を展開したが、それらが彼にとっての母国語と同じ英語で書かれているにもかかわらず、アメリカ文学について次のような主旨の発言をしている。アメリカ文学の作品を読むことは新しい声を聞くようなものだ。新しい声を聞くことはいつも難しい。まさに自分の知らない言語を聞くのに似ている。そもそも耳に入っていないのだ。それはこれまで使われたことのなかった筋肉、あるいは長いこと使われず硬直してしまった筋肉を使おうとするようなもので、恐ろしい苦痛が伴う。イギリス人からみてもこれだけ異質に見えるアメリカ文学である。だとすると、われわれ日本人のような伝統的社会に生きる読者にとって、アメリカ文学はさらに異質な文学として常に新しい声で語りかけてくることになる。それをこちらが受け止められるか否かは、読者の側が常に自分の殻を破れるかどうかにかかっている。

次の問題(1 - 30)には、それぞれ a , b , c , d の答えが与えてあります。各問題につき、a , b , c , d のなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a , b , c , d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

1. 次の文章のうち、アメリカの神話的理解を覆していった直接の原因として適切な記述はどれか。
 - a. 脱構築批評の副産物としての観点。
 - b. 移民の流入による人口構成の変化。
 - c. WASP によるアメリカ文学理解への批判。
 - d. ヴェトナム戦争における敗戦。

2. 本論文の主旨から判断して適切な記述はどれか。
 - a. 楽園神話や神の国神話によってアメリカ精神の特徴が捉えられるという考えは一つの妥当な見方である。
 - b. 楽園神話や神の国神話がアングロ・サクソンの優越感によって用いられたところにアメリカの自己理解の誤りがあった。
 - c. 楽園神話にせよ神の国神話にせよ、多民族国家であっても共通のヴィジョンとなりうる。
 - d. 楽園神話も神の国神話も WASP 同様、他のマイノリティーにとって意味を持った。

3. 本論文の主旨から考えてヘンリー・ナッシュ・スミスを取り上げた論点としてもっとも重要な点は次のどれか。
 - a. 彼がポピュラーカルチャーを研究対象に取り上げた。
 - b. レオ・マークスの『ザ・マシーン・イン・ザ・ガーデン』の先駆的役割を果たした。
 - c. 彼が『ヴァージンランド』を執筆中政治的環境に影響されていたことを認めた。
 - d. 「地上の楽園」のテーマをアメリカ西部に実現するという民衆の意識を具体的に示した。

4. アメリカ文学の定義に関する記述のうちもっとも適切なものはどれか。
 - a. アメリカ文学の定義は言語学的観点からすれば明確になしうる。
 - b. アメリカ文学とイギリス文学の違いは地域性からみて明確である。
 - c. アメリカ文学は多民族国家を背景としているので限定できない。
 - d. アメリカ文学の定義はアメリカとは何かという観点からすれば限定できる。

5. 「地上の楽園」について当てはまらないものは次のうちどれか。
 - a. ギリシア・ラテンにも起源がある。
 - b. アメリカ大陸に見いだせると期待された。
 - c. 中世では中近東に実在すると信じられていた。
 - d. アダムとイヴが追放された楽園である。

6. 本論文で述べられている予型論についてもっとも適切なものは次のうちどれか。
 - a. 「地上の楽園」の原型の探求に最大の価値を置く聖書解釈の方法。
 - b. 旧約聖書のすべての箇所が新約聖書と対応を保つことを論証する方法。
 - c. ヨナがキリストの原型であることを旧約聖書全体の精神から論証する方法。
 - d. アメリカに渡った清教徒が特に注目した聖書解釈の方法。

7. 文学史を考えるうえで、キャンノンについて本論文の主旨にもっとも当てはまる記述は次のうちどれか。
 - a. アメリカ文学史を構築するのに、決して変わることはないキャンノンに含まれる作品を見落としてはならない。
 - b. アメリカ文学史におけるキャンノンが当然大きく変わろうとしていることは、容易に推測できる。
 - c. 多民族国家としての人種や言語の問題を考慮すると、アメリカ文学史のキャンノンは一つではなく、複数想定しなければならない。
 - d. 常に異質なものを取り入れていく特徴を持つアメリカ文学史の構築に、キャンノンという概念を適用することは問題がある。

8. 本論文の論旨をさらに敷衍させると、もっとも適切な推論と思われるものは次のうちどれか。
 - a. 日本の伝統的視点を見直すと、アイヌ文学が日本文学史に含まれる可能性が生ずるかも知れない。
 - b. 原住民のインディアンにとっても、移民のユダヤ人にとってもそれぞれ固有な視点があり、アメリカ文化の核を求めることは的はずれである。
 - c. ヨーロッパ文明の完成者としてのアメリカという意識は神話を根拠に成立しているので、アメリカの世界における政治的社会的イメージが本質的に左右される性質のものではない。
 - d. 新しい包括的な神話が作り出されるまで、アメリカ文学史は相対主義の混迷に苦しむことになるだろう。

9. 本論文でレオ・マークスの『ザ・マシーン・イン・ザ・ガーデン』が取り上げられているが、以下の記述のうち適切なものはどれか。
- a. 彼のパストラリズムの視点から考えて、シェークスピアの『嵐』はアメリカ文学のプロローグとは考えにくい。
 - b. アメリカ人の精神を支配しているものに神話的樂園追求の衝動があるという視点からアメリカ文学の流れを明らかにした。
 - c. 19世紀後半の作品には機械文明の象徴と神話との過激な衝突がみとめられパストラリズムを否定した。
 - d. エリザベス朝の詩人マイケル・ドレイトンの「ヴァージニアに出航する人々へ寄す」にマークスの視点を見いだすのは適切でない。
10. 脱構築批評の一つの概念である“Indeterminacy”について適切な記述はどれか。
- a. 作品解釈における曖昧さを尊重する。
 - b. 脱構築批評の衰退のきっかけのひとつである。
 - c. 作品解釈が恣意的になることを意味する。
 - d. アメリカの神話的解釈衰退の原因とは考えにくい。
11. 本論文の主張からいえば、これからのアメリカ文学史において主流をしめるのはどれか。
- a. 人種や性別の問題を扱う文学。
 - b. アメリカの自然を扱う文学。
 - c. アメリカの神話を扱う文学。
 - d. WASP の意識を扱う文学。
12. 本論文に「ロングフェローに当てられるページ数がごくわずかになっていく」とあるがその理由はどれか。
- a. ヴェトナム戦争の敗北により、WASP 神話の人気に陰りが出てきた。
 - b. 黒人奴隷の女性が書き残していた日記や記録が新たに発見された結果、ロングフェローの作品の価値が低下した。
 - c. WASP の世界がメキシコ人や東南アジアからの難民やその他の国からの移民によって縮小された。
 - d. 多民族からなるアメリカ文化の特質から、WASP 中心のアメリカ文学理解が疑問視されるようになった。

13. アメリカ文学の主要な作品に登場するモチーフでなかったものは次のどれか。
- パストラリズムの主張。
 - 民主主義的公平を貫こうとする意識。
 - 「地上の楽園」の発見。
 - アメリカンアダムの登場。
14. 本論文の要旨に照らして、アメリカ文学の範疇からはずれるものは次のどれか。ただしどの作品も英語で書かれている。
- インディアン作家レスリー・シルコーの『セレモニー』(1977)。
 - 黒人奴隷フレデリック・ターナーの『黒人奴隷フレデリック・ターナーの生涯』(1845)。
 - ロード・アイランド植民地のイギリス人指導者ロジャー・ウイリアムズの『アメリカ言語への鍵』(1643)。
 - 自分の恋人のことを「マイ・ニューファウンドランド、マイ・アメリカ」と歌った詩人ジョン・ダンの「エレジー」(1609)。
15. 本論文に「ニューイングランドの『ニュー』には新約聖書の『新』に連なる意味が意識されている」とあるが、その関連を正しく捉えているものは次のどれか。
- イギリスを後にした清教徒が新約聖書的精神の実現を期待していた。
 - 旧約聖書の預言が成就される新約聖書、という関連を背景にしている。
 - 新しく発見された地にイギリスと同様の国家を作り直そうという意識がある。
 - イングランド地方から新大陸に渡った人々が新約聖書にちなんで名づけた。
16. ニューイングランドのプリマス植民地の指導者ブラッドフォードをある歴史家が「アメリカのモーセ」と呼んでいるが、この考え方としてもっとも適切な記述はどれか。
- アメリカンアダムの一例と考えられる。
 - 予型論のパラレルの一例と考えられる。
 - アメリカの神話化の一例と考えられる。
 - 「神の国」神話の一例と考えられる。
17. マサチューセッツ湾岸植民地を導いたウインスロップが目指したことは次のどれか。
- イギリス社会を原型にした理想社会をアメリカ新大陸に建設する。
 - 神の直接支配する天上における終末的理想社会を地上で模倣する。
 - 神話的解釈に基づき、新大陸に約束の神の国を建設する。
 - 旧約聖書の預言の実現としてユダヤ人移民も生活できる新たなるエルサレムを建設する。

18. クレヴクールが「アメリカ人農夫からの手紙」で指摘したアメリカの文化的空自についてもっとも適切な記述はどれか。
- 異文化が移植されやすい条件である。
 - 伝統が覆されるという伝統を持つことになる。
 - 「新しさ」が常に力を持つ文化を生み出すことになる。
 - ヨーロッパ的観点から見た解釈である。
19. アメリカ文学の定義を困難にしている理由としてもっとも適切なものはどれか。
- WASP がアメリカ文化の中心を築いてきたため。
 - アメリカが単一民族国家でないため。
 - アメリカがいわゆる伝統なき国家であるため。
 - アメリカ文学がイギリス文学と類似しているため。
20. R・W・B・ルイスの研究『アメリカンアダム』について当てはまる記述は次のどれか。
- 予型論に基づく典型的なアメリカ文学研究である。
 - 予型論的な意味でキリストのイメージを担うことがある。
 - アメリカ文学の神話的解釈の一例と考えられる。
 - 歴史を背負った『草の葉』の主人公に見られる特質である。
21. 本論文に日本人にとってアメリカ文学が異質な文学として常に新しい声で語りかけてくるとある。その理由としてもっとも適切なものはどれか。
- 日本の社会は伝統を持つ社会であるから。
 - 日本人も「それぞれの時代に独自の書物を持っている」から。
 - 日本人にとって英語が異質な言語であるから。
 - 日本の社会がアメリカ社会以上に変化しているから。
22. 次の文章のうち本論文で取り上げられた予型論の枠組みを持っている文はどれか。
- 「わたしたちは、キリストのからだである」。
 - 「人はみな地上では旅人である」。
 - 「マリアは第二のイヴである」。
 - 「主はわたしの牧者である」。

23. 本論文でいうアメリカ理解のために用いられた神話について正しい記述はどれか。
- インディアンの神々にまつわる神話が根底にある。
 - 現代アメリカ人の心をも支配している。
 - WASP 以外の人種にも受け入れられた。
 - そもそもアメリカには存在していなかった。
24. WASP について本論文の主旨にあてはまる記述はどれか。
- その衰退はアメリカ文化の活力の証とも捉えられる。
 - アメリカの非イギリス化の中心となった人種である。
 - ヨーロッパをアメリカの理想とした人種である。
 - 植民地時代から黒人を比較的寛容に受け入れてきた人種である。
25. 本論文が論ずるアメリカにおける伝統のあり方について当てはまる記述は次のどれか。
- それぞれの世代が社会を作り変えていかなければならないという思想。
 - 白人およびプロテスタント優越主義がアメリカの伝統の中心となるべきだという思想。
 - イギリスのヴィクトリア朝時代の文化をアメリカに土着化させるという思想。
 - アメリカ的素材をヨーロッパの文学形式を用いて表現するという思想。
26. ヨーロッパの白人がアメリカ大陸には文化的空白しかないと判断した理由は何か。
- 未知なる文化を正当に評価できなかったから。
 - 自然と文化の対立を持ち込んだから。
 - 未知なる空間を神話的に解釈したから。
 - 自然は文化と調和すると考えていたから。
27. 本論文におけるコロンプスについてもっとも適切な記述はどれか。
- 彼は熱狂的なフランシスコ派の修道士であった。
 - 自分の名前にも宗教的使命を意識するほどの人物であった。
 - 神話的理解が崩壊したので、彼の新大陸発見の意義は失われている。
 - 直接事物を目撃しなければ信じない近代的精神の持ち主であった。
28. 本論文によればアメリカ人が選民思想を持つにいたった理由としてもっとも適当なもののは次のどれか。
- 予型論的なアメリカ理解。
 - アメリカ大陸へのユダヤ人移民。
 - 民主主義国家としての誇り。
 - インディアンに対するアングロ・サクソンの優越感。

29. 本論文で論じられているアメリカ大陸発見の意義についてもっとも重要なものはどれか。
- a. コロンブスによってなされたものではない。
 - b. 人の手の加わっていない自然を発見した点。
 - c. 地上の楽園を発見したと勝手に解釈した点。
 - d. コロンブスがインド発見と取り違えていた事実。
30. この論文全体のタイトルとしてもっとも適切なものは次のうちどれか。
- a. アメリカ文学と地上の楽園神話。
 - b. 神話によるアメリカ文学史の再構築。
 - c. アメリカ精神の神話的起源とその変貌。
 - d. 文学にみるアメリカ神話の形成とその軌跡。

参考文献

Sacvan Bercovitch, *The Puritan Origin of the American Self*, 1976.

Sacvan Bercovitch & Myre Jehlen. ed., *Ideology and Classic American Literature*, 1986.

Robert C. Christopher, *Crashing the Gates*, 1989.

A. Bartlett Giamatti, *The Earthly Paradise and the Renaissance Epic*, 1966.

R. W. B. Lewis, *American Adam*, 1955. (齋藤光訳『アメリカのアダム』)

Leo Marx, *The Machine in the Garden*, 1964.

Henry Nash Smith, *Virgin Land*, 1955.

増田義郎『コロンブス』1979年。